

かぐらおが

第 51 号

昭和62年3月25日

編集 旭川医科大学
厚生補導委員会
発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は前学長 山田守英氏)



(写真撮影 動物実験施設 稲場 茂)

早春の朝日

1987年卒業の皆さんへ……………黒田 一秀…………… 2	サークル紹介……………10
卒業生を送る……………富岸 勉…………… 3	研究室紹介(薬理学講座)……………橋爪 裕子……………17
卒業にあたって……………岡井 隆広…………… 4	スキー教室……………17
卒業によせて……………澤井かおり…………… 4	学生証の更新及び査証について……………17
卒業にあたって……………原田 龍一…………… 5	借用物品の返却と貸出停止について……………18
昭和61年度講演会一覧…………… 6	行動計画書の提出について……………18
1年のあゆみ…………… 7	窓 外……………笹森 秀雄……………18
学生団体一覧…………… 9	



1987年卒業の皆さんへ

学長 黒田 一 秀

人間に対する愛があれば、技術に対する愛もあるからである。

—ヒポクラテス文書：バラングリアイ第6章

昭和61年度卒業の皆さん、おめでとうございます。今回は124名の方を送り出すことができました。教職員にとってもこの上ない喜びであり、御家族ほか関係の方々と共に心からお祝いをいたします。

9回生の皆さんは、クラス定員が120名になってから3回目の卒業に当たります。開学15年まだ歴史の浅い本学にとって、1年ごとの新卒業生の社会参加がどんなに待ち遠しいことでしょうか。皆さんを迎えて同窓会員は897名を数えることとなります。来年度には千名を超すことになりましょう。

先輩卒業生諸氏の働きが蓄積されて、旭川医大の卒業生は、よく基礎学力を備え、若々しく、純真であるというような評価ができつつあるようであります。この伝統の芽を育て、やがて旭川の自然のように気宇の大きな人物に成長されることを願っております。

学生の時は、医学の先人達の知的遺産の精髓を、学問として整合性のある、一種の濃縮された知識として受け取り、それを各人なりのやり方で咀嚼消化してきたわけです。これからは医の第一線に立つものとして、なまの事実と直接取り組みねばならないのであります。個々の情報の洪水のなかで判断を要求されることになるのです。事実の単なる論理判断だけでなく、生命活動に結びついた価値判断の世界に踏み込むのであります。事実なのか偽りなのかばかりでなく、善か悪か、正か誤かの判断を迫られる日常となるのであります。

しかし6年以上の学園での勉強と友情の交わりのなかで、皆さんが獲得したものを思えば、これは根本的にはそう難しいことではないと考えています。その為に準備してきたのです。持っている力を惜しみなく発揮されればいいのであります。

今の社会は、技術社会、情報社会と要約できましようが、軽薄短小で変化の速い社会であります。身近な医の最新技術の応用についても、社会一般の同意に達していないものがあります。在来の価値観では処理しきれないことができてきます。死の判定、臓器移植、人工受精等々の領域でバイオエシックスの議論がやかましいこの頃です。これらはしかし、時代の現象で、いずれ方向づけられることでしょう。それよりも日常平凡な仕事のなかに問題はあります。生の問題は一つずつその事例ごとに対応すべきものであるからです。

そのための判断の目を養うには、人それぞれのやり方しかなくありますが、おせっかいかも知りませんが二、三述べさせて頂くと、一つには友達ごとに同窓の友、先輩後輩との交わりから得るものがあると思います。また一つには、選んだ専門の修練を通して、専門を深めることによって物が見えてきます。専門職の意味は、社会的責任を分担しているということでもあります。専門に閉じこもらず、変化してゆく流のなかで広い視野をもってこそ専門家の任を果たすことができましよう。

さらに一つ、古典を読むことを特におすすしたいと思えます。忙しい高度に技術的な社会にいればいるほど、時空を超えて伝えられてきた古典籍は人生の最奥のものへの示唆を与えてくれることを経験します。日常のなかで落付いた心を保つことができます。これは古来の賢人先人によって奨められてきたところであり、例えばW.オスラーの本には医学徒のための枕頭の書の目録があげられていることを御存知の人もあると思います。もちろん古典といえど、時代の影響下にできたもので、それぞれ特色と片寄りがあり、一字一句拳拳服膺するという読み方を奨めているものではありません。自由な読み方のでいいのです。

わたしたちは、そんな風にして、あらゆる事象を通して互の連繋のあることに気付く、人生観とか世界観とかいうものが、生涯をかけて形成されてくるのであると思えます。

論語にも、ヘブライの文書にも、聖書にも、人との付き合い方について共通の箴言があります。「己の欲せざる所を人に施す勿れ」「人にしてほしいとあなたがたの望むことを人にもそのおりにせよ」とあります。西欧社会では18世紀頃からこの一句を黄金律（英：golden rule）と呼ぶようになって今日にいたっています。医療技術を支える思想はこんなところにあるのではないのでしょうか。

新卒業の皆さん、医師人口の多寡などに捉われることはありません。皆さんの前には、あなたの態度に応じていくらかでも広がり深くなる世界が待っています。

皆さんの健康と御活躍とを心からお祈りしています。

卒業生を送る

宮 岸 勉



◇祝御卒業

九期生の皆さん、御卒業おめでとう。

六年間の在学中、陰に陽に皆さんを支えてこられ、卒業を待望しておられた御家族の方々のお喜びと将来にかける期待の大きさには計り知れないものがあると思います。また、社会が、大学が、卒後の皆さんを常に見守っており、一人一人が診療に研究に輝かしい成果をあげてくれることを願っています。

在学中は講義、実習、試験などの繰り返しでしたから、皆さんとしては、もうこの辺りで学生生活を締めくくりたいと思ったことでしょうし、私自身も、学生時代を思い起こしてみると同じような心境で卒業を迎えたような気がします。しかし、卒業と同時に、臨床家あるいは基礎医学の研究者として、与えられる仕事の責任の重さを痛感させられるに違いありません。学生時代ならば通用したはずのある種の甘えが、これからは容認されなくなりますし、医療上のどんな責任も医師としての自分が一人で負うべきもので、ほかの誰かがその責任を分担してくれるなどということはありません。そして、日進月歩の医学の進歩に後れを取らぬよう学習を怠る訳にはいきません。医学、医療を志すということは、滅多に息抜きができそうもない人生を甘受することであると覚悟を決めた方がよいのかも知れません。自らの意志で医学部を選択した皆さんですから、このようなことはすでに十分心得ておられると思いますが、卒業にあたって、医師となる自分をもう一度見据えておくことは無駄ではないように思います。

◇臨床と研究—臨床の場合—

「優れた研究者は、同時によい臨床家でもある」とか、「研究は診療の姿を正す」とかいう言葉は、これまでに幾度となく聞かされたことでしょう。私も全くこの言葉の通りであると信じています。日常の診療を通じてさまざまな疑問や未知の事柄に遭遇し、病者のためにそれの一つでも二つでも自分で解明してみたいと思う所から研究が始まります。いうまでもなく、現代の医学は先達のそのようなヒューマニズムと旺盛な探究心の所産を礎として成り立っているのですから、私達もその延長線上で努力すべきだと思います。診療と研究を両立させるには、時間的にも肉体的にも相当な負担がかかりますが、医師としての道を歩き始めた以上、私達はまさに「やるしかない」という訳です。皆さんの若い頭脳と思われた体力は、研究を行うのにきわめて有利な条件ですから、それ

を効率よく働かせ、研究活動を介して臨床家としての強靱なバックボーンをはぐくんでほしいと思います。社会もそのような医師が多数育つことを期待しているはずで

◇社会生活のルール

時折思うことは、私達は、医師である前にまず組織社会の一員として広い意味でのルールをわきまえなければならぬということです。市中の病院であれ大学の研究室であれ、それぞれが一つの組織社会ですから、そこにはおのずから守るべきルールがあるのは当然のことです。思いやりも協調性も忍耐も礼節も、そのどれをおろそかにしても自分の活動空間を狭めてしまいますし、当然、仕事をしていく上で支障もでてきます。組織社会を生きるということは、それなりの努力と工夫を要することですが、一例として、職場で管理職にある一人の女性が書いた文章のあらましを紹介しておきましょう。

「組織において自己主張が強すぎると受け止められなくなり、余程のことがない限り実力があってもその人の存在がどうしても必要であることはほとんどなく、その人がいなければ潰れるようでは組織とはいえないのです。歯車の一つでしかない個人の存在は、きしみを発し出すとすぐに取り換えられてしまいます。いちいち文句を言ったりつかつかかたりする人は、仮に仕事ができても見向きをされなくなります。そうなれば、その人はそれでおしまいです」、そして「例えば、いわれたことを優れた出来栄で仕上げれば、それは立派な自己主張になり、その主張は組織の中で必ず認められるでしょう。」

このような考え方は、単に「長い物（組織社会）には巻かれる」というような妥協的な考え方とは異なるもので、組織社会の人間関係を円滑に保ちながら優れた仕事をする上で必要な大人の知恵の一つを示していると思うのです。自己主張とはどういうことかを知っておくことは、組織化されている社会の中で自分の能力を遺憾なく発揮するためにきわめて大切なことです。

明日に向けて限りない可能性を秘めた皆さんの前途を心から祝福して筆をおきます。

御卒業、本当におめでとう。

(第6学年学年担当 精神医学講座 教授)

卒業にあたって

岡井 隆広



入学前、旭川は日本一寒い所で、厳冬期には-30℃にも冷え込むと聞いていたので、本州育ちの私は旭川で6年間もやっていけるだろうかと、といささか不安であった。

しかし旭川に来て、確かにしばれる寒さであったが、純白できらきら輝く雪、そしてその中に際高くそびえ立つ白亜の旭川医大を見て、これが憧れの大学だ。よし頑張るぞ。と自分の胸に手を当て、希望に満ちあふれていた頃から既に6年が経とうとしている。

当時、大学の講義、自炊生活、コンパ、旅行等々体験すること全てが新鮮で、さらに大学生なのだから何もかも自分の意志で物を考え、行動できる。しかし自分で行ったことは自分で責任を取らねばならない。と解放感と共にちょっと不安を感じるスタートだった。

そもそも大学とは自由な雰囲気、試験も高校のように大変でないと思っていた自分は、うちの大学の試験がこんなに厳しいとは思わなかった。たとえば授業を真面目に聞き、ノートを取り、きちんと試験勉強をしても、ほんのちょっとした試験前日の勉強具合、当日の体調とかで結果の良否が変わってくるし、一緒に勉強してきた友人と、試験の結果によっては学年という隔たりができることもあるということで、試験とは非常に冷酷で無情であると憎みつつ、毎年試験の月になると焦りとある種の恐怖を感じずにはいられなかった。

ところが私はポリクリを回り、初めて試験の意味という必要性を身を持って理解できたような気がする。外来とかで患者さんを問診する時、患者さんの病気を治して欲しいという気持ちはよくわかる。いかに辛いかもよくわかる。何とかしてあげたいと思う。が、一体この患者さんはどういう種類の病気で、これからどういう検査をして、どういう治療をすればいいのか。予後はどうか。それらが全く見当もつかなければ、医師と患者のお互いの気持ちが通じないということ、思いやり、温かい気持ちは当然必要だが、それだけで患者さんに安心感、信頼感を持たせるのには限界があること、つまり患者さんの病気を医学的に十分把握した上で患者さんと接することにより、初めて医師患者間の信頼関係が生まれてくるのではないかということである。その為に学生時代にできるだけ知識をつける努力をしなければならず、そして押し付けられるようで自主的ではないが、普段勉強しなかった私にとってその知識をつける機会が試験勉強であると考えようになった。

話は変わるが、私はスキー部に入りクロスカントリースキーをやった。スキー部は部員70人と人数の多いクラ

ブで、私はこのクラブで数知れない貴重な経験を積むことができた。

クロスカントリーのイメージとして鼻水、よだれを垂らし、とても苦しい……。あまり良い印象を持たれていない。確かに滑っていると辛い。たまに低血糖発作を起こし、目の前が暗くなる。しかし思い思いのスピードで大自然を満喫しながら自分の力でゴールをめざす。滑っていると普段のフラストレーションも吹き飛ばし、何といっても50kmとか長距離を滑り終わった後、やったぞ！とこの感激、満足感、充実感、勝敗はどうであれこの気分は最高であった。これがあるからこそ滑っている最中は苦しく、もう絶対やめよう。と思っても、しばらく経つと又滑ってしまう。

又スキーを通じ、同じスキーを愛する者としてクラブ員のみならず、多数の先生方、さらに一般のスキーヤーとのつながりができたこと。クラブ活動で将来医師として必要な連帯感、人の気持ちを理解し思いやることを学ぶことができた。

旭川は全国的にも有名な自然に恵まれているが、意外と大学のすぐそばにも美しい自然がある。昼休みや放課後、空港に向かってジョギングすると、春には雪解けの中ひばりがピーピー鳴いていたり、新緑の牧場で牛が草を食べていたり、神楽岡公園の緑も忠別川の流れる、見る度行く度に心が洗われて澄んでくるようであった。

このような美しい自然、そして情熱を持って教えて下さった先生方、親身になってお世話してくれた職員の方々、そして既に卒業なさった先輩方、一緒に勉強し語り合った6年生、僕たちを応援してくれた後輩たち、このように恵まれた環境の中で6年間過ごせて、最高の大学生活であった。これからも母校旭川医大の発展を祈りつつ、この有意義な大学生活を青春の1ページとして一生の思い出としたい。

卒業によせて

澤井 かおり



今は2月下旬。松の木の雪が重くなり、身を刺す寒さの中にも春の息吹きを感じられるようです。長いようで短かった一と人はよく言いますが、私にとっては長い長い6年間でした。皆の顔も初々

しかった入学式がずいぶん昔のことに思われます。

中学2年の秋、淡い恋心を抱いていた人が病没しました。それから4年あまり後、「絶対落ちるから、受けるだけでも受けさせて」と母の反対を押し切って旭医を受験した私は、思わず合格してしまったのでした。そして私の旭川での生活が始まりました。

「医学生ってまじめな人ばかりなんだろうな」という

予想がみごとにはずれたのはいうまでもありません。その中でも一番個人的だったのが、前年に入学して1年間1年生を練習していた能登の坊主、S氏でした。彼はその後やっちゃんのように学生課に幅をきかせ、学友会の予算を自由自在に操る恐るべき存在に成り上がったのです。

初めての講義の日から煙草をふかし（今は禁煙しています、並木先生）、S氏の権力をかさにきて番をはっていた私でしたが、S氏と同様に勉強は苦手でした。それでも3年生の某日には、細菌学の試験に備えて徹夜でがんばったものでした。しかし、意気揚々と登校した私を襲ったのは無気味な胸騒ぎ……念のため掲示板を見にいくと何と！ その日の試験は寄生虫学だったのです。もし早めに登校していなければ、今の私はなかったでしょう。正味1時間程度の勉強でとってしまうという奇跡はその後、5年生の整形外科学でも起こりました。それから、3度目の正直で本当に落ちると大変困るので、試していません。ちなみにそれだけががんばった細菌学は落ちました。そして3年生での再試の数は「むつつ」になっていました。しかし私はそこでも、不死鳥のように蘇ったのです。むつつの再試を乗り切り無事4年生になった日、身体中に朝日を浴びながら私は思いました。

「もう私の行く手をはばむものは何もない」と。それは正解でした。5年生の魔の3週間試験では、誰もが信じられない（本人でさえ）「無再試」をやったのけたのです。その時私は再試仲間のヒーロー、いやヒロインになっていました。一部では「3年生の時、再試打ち止めになったんだ」という意見もありましたが。

ということで、勉強の話はこれくらいにしておきましょう。グルカゴンとガストリンの区別が今だに分からないとか、悪性黒色腫と malignant melanoma が同じものだというのに、皮膚科学の卒試当日の朝初めて気がついたとか、そういう話は山ほどあるけど恥かしいからおいとてと。

この6年の間に、大学のまわりもずいぶん賑やかになりました。高校、団地、店、家々など、いつの間にかふえていた建物のように、私のまわりにもいい友人が沢山できていました。勉強会の仲間は、その中で一番出来が悪くてかつわがままという、しょうもない私を見捨てずに力を貸してくれたし、ポリクリのグループの人達は、熱を出しがちだった時も、いやな顔ひとつせず穴を埋めてくれました。その他にも「ありがとう」や「ごめんさい」を言いたい人達はまだまだ沢山います。6年間で得た最も大きなものが、これらの友達だといえるでしょう。「みんな、今までありがとう。これからもよろしくね！」

文章がクライマックスの盛り上がりを見せてしまいましたが、もう少し続きます。さて、得たものがあれば当然失なったものもあります。その中で最も残念なのは、何を隠そうあの「ユッケジャン」なのです。今から考え

ると、激辛ブームの始まるずっと前から、旭医生や旭東生は流行を先どりしていたのでした。軟弱な私はいつもごはんだけでおなかがいっぱいになってしまい、スープまで残さず飲んだことがないのです。今、それが心残りでもありません。あのおじさんは、今もどこかであのユッケジャンをつくっているのでしょうか。

さて唐突に終章です。間もなく遅い雪どけとともに初々しい新入生が入学し、この地で青春を過ごすのでしょう。この大学で学ぶ人、教える人、働く人—この大学に集うすべての人々が幸せになりますように、大雪山の白い峰に祈りながら、私は巣立っていきます。乱文失礼。

卒業にあたって

原田 龍一



10年間の私の大学生活が漸くその幕を閉じる。その10年のうち旭川で暮らした6年間は、今思うに一瞬の出来事であったかのようでもあり、又遥かな長い時間であったかのようでもある。20歳代の殆

んど全てを費したこの大学時代が自分にとって本当に価値のあったものかどうかはまだわからないが、今もまだ彷徨の中にある私にはこの卒業が一つの転機になってくれるのではないかと、ささやかな期待を抱いている。

横浜での4年間の大学生活に自ら終止符を打ち旭川へ来た時は、全てのものが輝いて見えた。一度は諦めた医師への道を歩み直すことができた私には、かつては講義に出席するよりも喫茶店や雀荘にいることの方が多かったような一般教養の講義も、そして以前の自分の専門だった化学の講義さえも新鮮に思えた。横浜の大学では、試験の時に答えが皆目わからず、解答用紙に星飛雄馬の似顔絵など描いていた私とは別人のごとくであった。そんな私が周りの人の目には優等生とでも映ったのだろうか、よくノートを貸したり質問を受けたりもした。

しかし輝くものは必ず色褪せる。それは私が人に優等生と思われるという、人生初の快挙に少々浮かれ、自ら優等生を演じ始めたためでもあろうが、私の学んできた医学が、人を対象としていながらも極めて自然科学的な性格の強い学問であることにも無関係ではないだろう。医学の情報量は膨大である。しかしその多くは「病氣」という、本来形のないものについての情報であり、学生時代にはその情報は、実際の対象である「患者さん」から明らかに切り離された形で我々に提供される。医学教育の中で両者を一体化して学ぶ場として設けられているのが臨床実習なのであろうが、皮肉なことに私がその両者の隔たりを実感したのは、この臨床実習だった。甚だ不謹慎なことではあるが、私の目には患者さんが教科書に記載されている疾患の特徴を備えた material である

かのように映ってしまったことさえある。又外科手術の際には、大きく開かれた腹部を見ながら、そこに局所解剖学や手術手技の図講のみを投影している自分にハッと、患者さんの顔を背伸びして見つ、それが模型の胃などではないという当たり前のことを確認したこともあった。

言うまでもなく医学の進歩は目覚ましく、疾患を細胞レベルで考える時代から、分子レベル、遺伝子レベルで考える時代に入って久しい。しかしその源泉を辿れば、そこにあるのはその病気を患った患者さんなのであり、その連続的な延長線上に病態生理や病因論はある筈である。しかし私の頭の中では、いつしか“病氣”は“患者さん”から離れて一人歩きを始め、国家試験の勉強に追われる今では、医学知識は一人歩きどころか一つの受験テクニックにすぎなくなりつつある。

そのジレンマに悩み始めた頃から輝きはすっかり色褪せ出した。それを日本の医学教育とか国家試験制度のせいにするつもりはない。ただ、それが美德であるかのごとく講義に出席し、ノートを綺麗に取り、単に“病氣”の勉強だけをしてきた私は、何か勘違いをしていた気が

してならない。与えられすぎる環境の中で、それに馴化しつつ優等生を演じて来た私は、いつの間にかそれらの錯覚の中に陥り、更に“患者さんは病める人であり、自分は健康人である”という意識の中で医療を考えるようになっていたのかもしれない。

4月の国家試験に合格すれば、私も晴れて医師の仲間入りである。医師としてスタートする上で各人が心に描く理想像は人それぞれ違うだろう。私は錯覚の中でもがいているうちに自分の中ででき上がってしまった、“病氣”と“患者さん”との間のギャップを、少しずつ、そしてゆっくり埋めてゆきたいと思っている。星飛雄馬を描いていた頃の私は全くの劣等生ではあったけれど、何も知らずひたむきに医学部に憧れていたあの頃が懐しくもある。しかし、そういう頃に誰もが抱いていたであろう思いこそが、やはり原点なのではないかと思う。

一瞬にすぎなかったようでもあるが、多くのことがあった6年間。だが、感傷をもってそれを振り返るにはまだ早いだろう。いつかどこかの街で旭川を想う時、この6年間は雪と氷の思い出とともに、再び輝いて見えるのかもしれない。

昭和61年度講演会一覧

昭和61年度本学で開催された講演会は次のとおりです。

開催日	演 題	演 者	担当講座等
6月6日 (金)	近視の本態と世界における研究の概要	デンマーク国 オーゼンセ大学 主任教授 エルンスト・ゴールドシュミット	眼科学講座
9月12日 (金)	免疫グロブリン遺伝子発現の制御	九州大学 生体防御医学研究所 教授 渡 辺 武	病理学第二講座
10月7日 (火)	細胞表面構造と細胞のガン化	京都大学 薬学部 教授 山 科 郁 男	生化学第一講座
10月15日 (水)	北海道におけるエキノコックス包虫症の疫学とその対策	北海道立衛生研究所 所 長 熊 谷 満	検査部
10月21日 (火)	運動時の神経内分泌反応と糖代謝	ポーランド国 科学アカデミー医学センター 主任教授 ハンナカシウバ・ウシルコ	生理学第一講座
10月23日 (木)	生化学的薬理学	大阪大学 医学部 教授 和 田 博	薬理学講座
11月7日 (金)	肺のガス交換と最近の研究	山形大学 医学部 教授 望 月 政 司	実験実習 機器センター
1月21日 (水)	麻酔と内分泌、特に神経伝達物質との関連において	弘前大学 医学部 教授 尾 山 力	麻酔学講座

(庶務課)



昭和61年

4月

- 11日 昭和61年度入学式 (於 体育館)
 [新入生 120名 (うち女子学生23名)]
 21日 新入生研修 第1回目 (於 第2~第4セミナー
 22日 室、和室)



新入生研修 (第1回目)

5月

- 14日 医師国家試験合格者発表
 (本学合格者 116名 合格率97.5%)

6月

- 12日 第12回医大祭
 15日 (テーマ) 今、原点にかえる。
 (医大祭実行委員会委員長 尾形文智)



第12回医大祭

- 30日 学位記授与式 (於 学長室)
 (学位記被授与者 4名)

7月

- 4日 第33回北海道地区大学体育大会
 6日 (当番校 帯広畜産大学)
 [本学参加種目] 陸上競技(男女)・準硬式
 野球・軟式庭球(男女)・バスケットボール(男女)
 ・バレーボール(男)・サッカー・卓球(男女)
 ・バドミントン(男女)・剣道(男女)・弓道(男女)
 (本学参加学生数) 182名
 (成績) 男子31大学中19位、女子32大学中9位
 20日 第29回東日本医科学学生総合体育大会夏季大会
 8月6日 (主管校 独協医科大学)
 [本学参加種目] 陸上競技(男女)・準硬式
 野球・硬式庭球(男女)・軟式庭球(男女)・

卓球(男女)・バレーボール(男)・バドミントン(男女)・サッカー・バスケットボール(男女)・柔道・剣道・弓道・空手道・水泳(男女)・ゴルフ
 (本学参加学生数) 386名
 (成績) 35大学中9位

8月

- 1日 保健管理センター所長に宮岸教授(精神医学講座)が発令された。
 8日 昭和61年度納骨式 (於 本学納骨堂)

9月

- 3日 体育大会 (主催 学生)
 (学年対抗) サッカー・バスケット・駅伝・2,000mリレー・つなひき
 (有志対抗) ソフトボール・バレーボール
 8日 昭和61年度旭川医科大学公開講座
 10月8日 「思春期危機」



公開講座

- 24日 昭和61年度解剖体慰霊式並びに文部大臣感謝状伝達式 (於 体育館・第4セミナー室)
 30日 学位記授与式 (於 学長室)
 (学位記被授与者 7名)

10月

- 6日 開院10周年記念式典並びに記念祝賀会
 (於 病院会議室・第1会議室)
 9日 第29回東日本医科学生総合体育大会冬季大会
 (主管校 弘前大学)
 62年
 3月27日(本学参加種目) ラグビー・スキー
 (本学参加学生数) 111名
 27日 新入生研修 第2回目
 31日 (於 和室・職員研修施設)

11月

12月

- 15日 スキー教室 (於 北大雪スキー場)
 16日 講師4名 厚生補導委員会委員1名
 参加学生 32名



スキー教室

昭和62年

1月

- 19日 冬季スポーツ大会 (主催 学生)
 21日 (学年対抗) バスケット・雪中サッカー
 24日 昭和62年度大学入学者選抜共通第1次学力試験
 25日 (本学会場 587名)

2月

3月

- 1日 昭和62年度旭川医科大学入学者選抜第2次試験
 2日 (受験者 506名)
 6日 昭和62年度旭川医科大学大学院入学者選抜試験
 (受験者 17名)
 14日 昭和62年度旭川医科大学大学院入学者選抜試験
 合格者発表 (合格者 16名)
 18日 昭和62年度旭川医科大学入学者選抜第2次試験
 合格者発表 (合格者 150名)
 25日 学位記授与式 (於 第1会議室)
 (学位記被授与者 10名)
 第9回卒業証書授与式 (於 体育館)
 (卒業生 124名)

(庶務課・学生課)

学 生 団 体 一 覧

昭和62年3月現在

体 育 系

文 化 系

団 体 名	会 員 数	責 任 者		顧 問 教 官	団 体 名	会 員 数	責 任 者		顧 問 教 官
		学 年	氏 名				学 年	氏 名	
ラグビー部	35	4	米山 哲司	岩田 光高	写 真 部	26	4	鈴木 隆司	谷本 光穂
準硬式野球部	31	4	越湖 進	長 和彦	英 会 話 ク ラ ブ	19	3	根本 隆一	平野日出征
卓 球 部	46	4	井手 宏	松本 光博	医 療 研 究 会	33	5	松田 彰	中島 進
陸上競技部	19	4	前田 高宏	美甘 和哉	茶 道 部	18	3	府川 悦士	原田 一典
ス キ ー 部	75	5	岸 正朗	東 匡伸	棧 敷 文 の 会	26	3	中野 悟	岡田 雅勝
ゴ ル フ 部	22	3	紀野 泰久	寺山 和幸	映 画 研 究 会	18	5	今井 政人	建部 高明
ボディービルディング部	23	4	大西 通広	山下 幸紀	将 棋 部	9	3	阿部 義明	上口勇次郎
硬式庭球部	43	4	小原 由史	米増 祐吉	J A Z Z 研 究 会	14	3	浅賀 浩孝	宮田 昌伸
バドミントン部	28	4	黄 仁煥	山下 裕久	囲 碁 同 好 会	10	2	花岡 淳一	岡田 雅勝
バスケットボール部(男)	28	4	小笠 寿之	久保 良彦	キ タ ー 部	16	2	永坂 嘉章	原田 一典
空 手 道 部	14	4	横山 哲朗	猪俣 光孝	ロ ッ ク 研 究 会	26	3	近藤 俊一	土肥 聡明
柔 道 部	12	4	尾形 文智	平山 隆三	障 害 者 問 題 研 究 会	10	5	土屋 芳治	笹森 秀雄
サ ッ カ ー 部	23	3	高橋 啓	水戸 勉郎	聖 書 研 究 会	6	3	大角 晃弘	谷井 広樹
バレエボール部	28	3	渥美 敏也	吉岡 一	プ ラ ス ・ ア ン サ ン プ ル	18	3	加藤 貴行	北 進一
剣 道 部	40	4	星 智和	森 茂美	室 内 合 奏 団	17	3	生出 邦仁	北 進一
山 岳 部	34	3	佐藤 篤司	八幡 剛浩	科 学 論 研 究 会	7	4	長谷川公範	中島 進
弓 道 部	26	4	佐藤 紀	黒島 辰汎	女 子 学 生 の ひ ろ ば	8	5	武井 理子	岩瀬 次郎
ワンダーフォーゲル部	34	4	佐藤 淳	笹森 秀雄	V. R. A. (ビデオ研究会)	33	4	明 茂治	田中 達也
アーチェリー部	12	3	松山 剛	丸子 基夫	フ ェ ー ク 研 究 会	5	4	鈴木 隆司	久津見晴彦
大東流合気武道クラブ	15	3	今石 寛昭	中島 進	ア マ チ ュ ア 無 線 部	10	3	生出 邦仁	平野日出征
軟式庭球部"アップルズ"	26	3	大竹 孝明	宮岸 勉	東 洋 思 想 研 究 会	12	2	佐藤 正夫	原田 一典
硬式テニス同好会	26	4	谷内 弘道	安藤 御史	旅 と 鉄 道 研 究 会	10	5	吉田 克成	笹森 秀雄
水 泳 部	36	5	越中 秀和	竹光 義治	天 文 同 好 会	12	4	矢萩 英一	相田 一郎
白い恋人(基礎スキー & 山岳スキー同好会)	38	3	合谷木 徹	丸子 基夫	旅 芸 人 C L U B	16	3	福田 雅	加地 隆
サイクリングクラブ 「チャリンコの会」	17	4	鈴木 隆司	笹森 秀雄	お 祭 り 研 究 会	30	4	尾形 和泰	橋爪 裕子
操 艇 部	13	4	吉原 秀樹	吉田 逸朗	バード・ウォッチング・クラブ	24	2	野村 徳之	丸子 基夫
女子バスケットボール部	16	4	竹田津末生	久保 良彦					
ソフトボール同好会	41	5	松坂 成行	久津見晴彦					
マラソンクラブ	18	6	岡井 隆広	大野 秀樹					
女子バレー部	10	2	小森 麻美	谷本 光穂					

サークル紹介



体育系

ラグビー部

スクラムを組む

押さなければ押される、ただそれだけのことに
全神経と力を集中させる、その瞬間。

夜のグラウンド

ゴールポストを通過しようとしたボール
一瞬、照明灯の光と交錯し、やがて闇の中へ消えた。

ラグビーの魅力とは何か

その答えが分かるまで、楕円球を追いつけるだろう。
(文責 北川寛之)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円	北海道ラグビーフットボール選手権大会、会長杯ラグビーフットボール競技会、東医体冬季ラグビー部門
遠征費自己負担	旭川・北海道・関東ラグビーフットボール協会加入



準硬式野球部

春——未だ雪を頂く大雪連峰を遥かに望み芋虫のようにグラウンドにはい出すと春の空気は未だ冷たい。

夏——我々の季節がやってくる。東医体を目前に部員が最も輝く季節である。外野の向こうを女子高校生が家路につく頃、我々の瞳はいっそう輝く。

秋——初雪の降る頃まで我々の活動は続く。初めての試験に向かい長い夜が続く。

冬——長く寒い冬がやってくると我々の活動もオフシーズンである。恒例のスキー合宿・麻雀大会・合コン・忘年会など行事が目白追しの季節でもある。

(文責 越湖 進)

経 費	活 動
会費 年額10,000円	道春季大会二部リーグ戦(2位)、道地区体(2回戦敗退)、三校対抗戦(2位)、東医体(3回戦敗退)、秋季大会(3回戦敗退)
遠征費自己負担 (若干援助あり)	北海道大学準硬式野球連盟加入



スキー部

御入学のみなさん、入りたいクラブは決まりましたか。旭川は、皆さんも御存知の通り、冬が長く寒いところです。ですから冬にできるスポーツを選ぶということはとても意味のあることだと思います。

スキー部は、学内で最大の規模を誇るクラブであり、楽しく家庭的な雰囲気各自が伸び々と練習しています。春にはスキー遠足、春山合宿、ダンスパーティーとシーズンオフにも色々な活動を行なっています。どうかみなさん一度スキー部に顔を出してみてください。そして厳しい冬を、スキーと勉強に燃えようではありませんか!

(文責 木ノ内基史)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円	旭川東医体冬季大会スキー部門(富良野)男・女総合優勝、旭川全日本

遠征費自己負担

学生スキー選手権(妙高高原)9位(86校中)、 $\frac{2}{5}$ -8全道学生スキー選手権1部(小樽天狗山)、 $\frac{2}{5}$ -6北海道学生オープン(サホロ国際)、サッポロスキーマラソン、旭川パーサー大会全道学生・全日本学生スキー連盟、全日本スキー連盟加入



硬式庭球部

短い北海道の夏を最大限にいかすには、やはりテニスしかない。雄大な大雪山をバックにプレイをするのは最高である。しかし、テニスの見かけの華やかさだけ見て入部しようものなら、その厳しさについてゆくことはできないだろう。我が部の特徴の一つに豊富な練習量がある。実力派かつ個性派ぞろいの先輩が多く、皆、後輩に対して丁寧に指導するつもりである。我が部の練習は、夏は毎日2時間、冬は体育館で週に2回2時間である。テニスを本気でやってみたい者は、一度練習を見学コートに来てもらいたい。

(責任者 小原由史)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円	北海道学生王座リーグ男子3部(1位)女子4部(1位)、東医体男子(ベスト16)女子(2回戦)
遠征費自己負担	北海道学生テニス連盟加入

バスケットボール部(男)

新人募集のお知らせ

年齢、学歴、経験の有無を問わず。

女子マネージャーも大歓迎！ 女子バスケ部に入ってくれるのも嬉しい。

現部員の半数以上は旭医に入ってからバスケを始めた

人ばかりです。初心者の方もお気軽にどうぞ。特に背丈が180cm以上ある人‘超’歓迎。練習は、それ程楽ではありませんが、減茶苦茶ハードという訳でもありません。とにかく見てみなければわからない。体育館へ見学に来て下さい。

(文責 寺西 正)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円	北日本医学生体育大会、東日本医科学学生総合体育大会、インカレ春・秋全道予選、地区体参加
遠征費自己負担	北海道学生・全国学生バスケットボール連盟、旭川バスケットボール協会加入



柔 道 部

一昨年までは、柔道部は、その存在は知られてはいたものの、‘練習しない部の代名詞’として学生の間では知られていました。しかし、昨年、8年ぶり東医体団体戦で決勝トーナメントに進出して以来、部員一同、練習に励み、現在では、‘練習する部の代名詞’として、その変貌を遂げました。

現在、部員は12名。スキー部やテニス部に比べれば、人数は少なく、華やかさもありませんが、部員の一人一人は、個性的であり、又、スポーツにかける情熱というものは、他のどの部にもまけないと思います。この広報誌「かぐらわか」が発行される頃には、クラブに入ろうと思っている人の大部分、又、その気がなくても大部分の人が何かしらのクラブに入っていることと思います。

しかし、いま一度、自分の個性なり能力について考えてみてください。柔道部は、随時、入部が可能です。男性は、体力をつけて柔の道を極め逞しくなるために、女性は、試合の成績をつけたり、練習中にタイムキーパーをするマネージャーとして活躍すべく、柔道部員一同、皆様方新入生の入部を心から望むことを最後に記し、この場の挨拶とします。

(責任者 尾形文智)

経 費	活 動
会費 無 料	東医体(決勝トーナメント進出)、北医体(2位)、旭川四大学対抗戦(優勝)
遠征費一部補助	旭川柔道連盟加入

サ ッ カ ー 部

新入生諸君、入学おめでとう。これで君たちも旭医サッカー部に入る資格ができたわけです。

当部は、札大を始めとして強豪ひしめく北海道学生サッカーリーグ1部で活躍しています。北海道の1部リーグに所属しているのは、本学ではサッカー部を除いて他にありません。これも、「同じやるならより高いレベルで」という、日々の練習の当然の結果であります。さらに、1部リーグ所属を支えているのは、大学で初めてサッカー部に入った人々なのです。サッカーは難しくありません。必要なのは、小さな努力と大きな知力です。

(責任者 高橋 啓)

経 費	活 動
会費 年額10,000円	北海道学生サッカーリーグ1部(3年連続4位)、総理大臣杯道予選(3位)、北医体(2年連続1位)、東医体(3位)
遠征費自己負担 (積立月 2,000円)	北海道学生サッカー連盟、日本・北海道・旭川サッカー協会加入



バレーボール部

我々バレー部は、創立以来伝統のコンビネーションバレーを武器に、各種大会で活躍してきました。しかし、この中でも先年度は、2部リーグとの入れ替え戦での敗戦、そして東医体での準優勝といった「あと一步」の悔しさもまた味わいました。今年は、この悔しさを糧に更に努力を重ねていこうと思っています。と、いつでも毎

日毎日ボロボロになる様な激しい練習をしているわけではありません。初心者も大歓迎の、親身の指導がモットーのバレー部です。さあ、新入生の皆さんも私達と一緒にバレーしましょう。

(責任者 渥美敏也)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円 (4月~10月)	5月上旬春季リーグ戦3部(3位)、5月下旬道医体(優勝)、7月下旬東医体(2位)、10月中旬秋季リーグ戦3部(2位)
遠征費自己負担	北海道バレーボール連盟、日本バレーボール協会加入



剣 道 部

我が部は部員数30名を越す、全国の医学部剣道部の中でも、学内でも有数の大型クラブです。剣道という人気のあるスポーツではありませんが、我が部には多くの人間を引き付ける魅力を持っています。剣道部は剣道だけをするために集まった集団ではなく、剣道を通して集まった人間が楽しく過ごそうとしている、そんな集団です。昨年は東医体での3年連続メダルの獲得は逃がしましたが、今年の東医体での優勝をめざすためにも、新しい仲間を増やすためにも、新入生のはにかんだ顔が、武道場で見られることを部員一同楽しみにしています。

(責任者 星 智和)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円	北海道学生剣道選手権大会(ブロックベスト4)、北海道地区医学部対抗剣道大会(優勝)、北海道医歯薬学生剣道大会(2位)、地区体(ブロック2位)、東医体(ベスト16)(女子個人)
他必要な徴収	武井ベスト16)、秋季新人戦(ベスト8)
遠征費自己負担	北海道・全日本学生剣道連盟、旭川剣道連盟加入



弓道部

彼女は弓をひく素敵な女性です。

枕カバーを漂白する様に、弓をひく事は彼女をきれいに洗います。魅力的な微笑みも、弓をひいている時の彼女のまなざしには、かないません。なにより真夏には、エアコンディショナーの効いた千八百ccのオートマチックで、しゃれたサックスを聴きながら、独り夕日の正面を走るのには彼女のお気に入りです。でも、弓をひいて額に汗する方が、彼女は大変気に入っています。

そして、彼女はとても幸せだと感じています。

(責任者 佐藤 紀)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円	6月全道学生弓道選手権(10位)、7月地区体(6位)、札医戦、東医体(4位)、10月女子戦(6位)、争覇戦(3部準優勝)、11月新人戦(本学主管13位)
遠征費自己負担	全道学生・全日本学生弓道連盟、旭川地区弓道連盟加入



大東流合気武道クラブ

我が大東流合気武道部は、総勢15名のクラブであり、月木金の昼休み、火土の講義終了後に武道場において、皆稽古に勤しんでおります。合気道には、スポーツ的な試合がなく、その実力は演武を通して推し量るよりないため、技を理解していない第3者にはわからないかもしれませんが、その真の実力は底知れぬものがあります。我々は、大東流合気武道の技と精神を会得せんがために日々の稽古に精進し、他大学合気道部との交流を通して大学生生活を有意義に過ごさんと欲するものであります。

(責任者 今石寛昭)

経 費	活 動
会費 月額 500円	7月下旬四大学(旭医、北大、北見工大、小樽商大)による全道学生演武大会、8月上旬大東流合気武道演武大会
	大東流合気武道総本部加入



軟式庭球部 アップルズ

軟式テニスはいマイナーで、かならずしも派手なスポーツとはいえません。しかし、軟庭は自分でやって自分が楽しむスポーツなのです。そして、軟庭は高々300gのラケットでゴムボールをひっぱたくだけですから、ちょっとしたコツをつかめば、筋力のない人でもうまくプレイすることができます。ちなみに、昨年の入部者は全員が未経験者でしたが、今ではラリーの続くすばらしいゲームを見せてくれます。試しにあなたも軟庭をやってみませんか。なお、我部は女子部員、マネージャー、コンパ要員希望者も大いに歓迎します。

(責任者 大竹孝明)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円	5月加盟団体戦、6月旭川選手権、7月上旬四医体、7月下旬東医体
遠征費自己負担	旭川軟式庭球連盟加入



白い恋人 (基礎スキー&山岳スキー同好会)

一年生諸君、旭川までやってきて、スキーをしないなんて、それこそ「損」というものだ。楽しいスキー仲間をつくりたい、そんな人のための同好会が、この「白い恋人」です。

初めてスキー板にのる人、テクを磨いて、ヒーローになりたい人、深雪に挑戦したい人、スキー場への足を心配している人、来たれ！白い恋人へ！一流のテク（とへんでこな曲乗り）を誇る白い恋人メンバー一同、その技を伝授すべく、諸君の入部を待っています。

（他の運動系クラブとのかけもち可です。）

（文責 竹田津原野）

経 費	活 動
会費 年額 2,000円	1/8-10 富良野スキー合宿、3月中旬 ニセコスキー合宿(4泊5日自炊)、 3月中旬北海道学生基礎スキー大会 出場 北海道学生基礎スキー連盟加入
合宿費 1回約25,000円	



女子バスケットボール部

新入生のみなさん、旭川医大にようこそ。女子バスケット部です。大学生になって何かスポーツを始めてみたいあなた、バスケットをやってみませんか。現部員のほ

とんどが大学に入ってきてからバスケットを始めました。初心者の人大歓迎です。丁寧に基礎から教えて上げます。練習は決して楽ではありませんが、体力に自身のない人でも是非入部して下さい。徐々に体力をつけてゆけばよいのですから。最後に、男子バスケット部の人とはみな、心優しく力持ちです。あっ、もちろん女子バスケット部の人もみんな心優しく力持ちです!!じゃね♥

（文責 寺西 正）

経 費	活 動
会費 必要なつど徴収	東医体、北医体、地区体、インカレ 道予選参加 北海道学生・全国学生バスケットボ ール連盟、旭川バスケットボール協 会加入
遠征費自己負担	



文化系

写 真 部

写真部のメインの活動は、学内での写真展です。毎年学祭の時期には最も活発になります。写真部員は兼部している人がほとんどで、ふだんは個人的な撮影活動ですが、何人が集まれば撮影旅行として遠征することもあります。

忙がしい人でも自由にやれるクラブです。

（責任者 鈴木隆司）

経 費	活 動
会費 年額 5,000円	6月医大祭における写真展 他、随時写真展

英会話クラブ

「Polyuria, pollakisuria, lassitude を主訴とする患者の、FBSが高値ゆえ、GTTを行ない、IRIも測定した……?」

ポリクリでは、英単語と略語にいつも悩まされている自分がなさないが、それは私が1年生の時からESSに入部しなかったからなのだ。5年生になって、英語の重要性を知りあわてて入部した時(酒につられたという説もある)には、「デル単」は、「愛国心」までしか知らないし、仮定法過去などは、存在すら忘れていた。

きびしい受験戦争を勝ち抜いて来た君達よ、現在のその英語力(偏差値60以上?)をくざらせてはもったいないぜ。我々には、マーク先生という、ハンサムでかっこいい先生がついているし、三単原のSすら知らぬ先輩も待っている。これからの医者は英語ができなければ相手にされぬ事ぐらい…シロートじゃあるまいし。

活動そのものは、ただ飲んで食べてるだけという声も聞かぬが、身につく人は身につくのだ。

6年後、旭医のスターとなる為に、Let's drink!

(文責 木村正一)

ギター部

私達ギター部では、週に1回合奏の練習をしています。その練習の成果の場として、7月には教育大ギター部と合同演奏会、9月には音楽系3団体合同の医大音楽の夕べの2つの演奏会があります。即ち、目立ちたい人にはそれなりに、そうでない人もそれなりに活動できる部なのです。また、ゴールデンウィーク・夏休みには部員の先輩後輩の交流を深めるための小旅行などのリクリエーションも行なっています。

(責任者 永坂嘉章)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円 演奏会費負担	10月旭川ギターフェスティバル



ロック研究会

我がロック研は、音楽好きの集団です。設備も整っており、専用の練習場もあって好きなときに練習できます。最近、Rversible や Project J など、けっこう知られるバンドも出てきました。活動としては、学校祭でのライブハウスをはじめ、自主コンサートや、他の企画に参加するなど、外での活動も盛んです。大学に来て初めて楽器を握ったような人でも、やる気があれば上達しますし、他のスポーツ系クラブとの両立も可能です。音楽の好きな人なら、間違いなく楽しいクラブです。

(責任者 近藤俊一)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円 その他合宿費等	5月マチイMOVEバンド合戦(最優秀賞)、6月Sonyオーディション旭川地区大会(準優勝)、医大祭



聖書研究会

「私は、ほんとうに惨めな人間です」

冒頭の言葉は有名なパウロが発したものです。彼は全知全能の神の前で自分がどのような人間であるのかを知って、こう嘆いたのです。『汝自身を知れ』ソクラテスの言葉ですが、この言葉の含蓄の深さには圧倒されます。私達は最も身近に存在しているにもかかわらず自分について自分は何者であるのか、どれ程知っているでしょうか。ソクラテスの言葉は、「自分の無知を知れ。」と言い換える事が出来ると思われれます。実際私達は自身の事すらも完全には知り得ていない、ちっぽけな存在であるのではないのでしょうか。今日、科学技術は人間の持っていた限界をどんどん小さくしています。それに伴って今まで問題とならなかった新たな倫理的問題がクローズアップされています。脳死、臓器移植、人工授精、遺伝子操作、男女産み分け等、様々な困難な問題が提起されています。科学技術はその性質上必然的に、出来る事は行ない、それが成すべきか成さざるべきかと言う問いには答える事なく突き進む事になります。私達が自分の姿を知り、そ

の限界を認める事が、これらの困難な問題を解決して行く第一歩なのではないかと思われまますがいかがですか。

(責任者 大角晃弘)

ブラス・アンサンブル

私達ブラスアンサンブル部は、部員19名余りのサークルです。主な活動として、学校祭、四大学ジョイントコンサート、音楽の夕べなどがあり、中でもジョイントコンサートは市内の四大学の吹奏楽部員が一堂に会する大規模なもので、50名近くもの合同演奏は、音楽の「合わせる」楽しさを教えてくれます。また他大学との交流が音楽を通して深まるといふのも魅力の1つではないでしょうか。今年は四大学混合でのコンクール参加の案もあり、実現されることを願っております。部員数、楽器数が少ないのが悩みですが今年も良い演奏をめざします。

(責任者 加藤貴行)

経 費	活 動
会費 月額 1,000円	7月市内4大学ジョイントコンサート



室内合奏団

大学に入って初めて弦楽器を手にとる人、かつてどこかでやったことのある人、バリバリ弾ける人といろいろな人の集まりです。

ひとりで弾くとつまらないけれど、ふたりになると俄然違いがでてくる。ならば、みんなで弾けばということので、年4回の発表を続けるようにしています。

大学に入ってバイオリンを始めて、卒業前にチゴイネルワイゼンを弾いた先輩もいます。人により歩みの早い遅いはあるけれど、一緒にやることで何かを得られるだろうと思います。

(責任者 生出邦仁)

経 費	活 動
会費(レッスン料) 月額 1,500円 その他年 500円程度	4月新歓コンサート、6月医大祭・附属病院で演奏、7月高木バイオリン教室発表会に参加



旅芸人クラブ

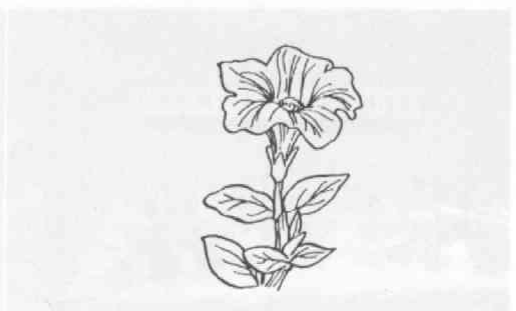
我が旅芸人クラブは、自作の作品をビデオで撮るといった一見演劇部(ビデオ部)風のクラブであります。しかしある時は、買い物公園通りでマージャンをしたり、又ある時は、カラオケでプロ顔負けの歌いっぷりを見せたり等々、得体の知れないパフォーマンス集団ともいえるでしょう。

スポットライトを浴び、スタッフに囲まれながら、ビデオカメラの前で、今までの自分とは違う、もう一人の自分を演じる。これは実際にやってみなくてはわからない、緊張感、興奮、そして、この世のものとは思えない程の快感が伴います。この感覚を、一人でも多くの人に分けてあげたいと思っています。

最後に、僕はこのクラブ、好きです……。

(責任者 福田 雅)

経 費	活 動
会費 無 料	6月医大祭に新作ビデオ発表



研究室紹介

薬理学講座

橋爪 裕子

夏の日の大木の木陰に集うごとく、安孫子教授のもとに集う教員は、現在20数名を数える。安孫子教授は教室員一人一人に細かい配慮をされて、厳しいけれど常に暖かく指導されている。本講座の研究テーマは、昭和49年の講座開設以来首尾一貫して、虚血心筋の病態生理とそれに対する薬物の効果に焦点がおかれている。市原助教は、虚血心筋における糖代謝の研究から出発し、心筋組織のpH変化、さらにエネルギー代謝へと研究を進展させた。また摘出灌流心臓を用いた心筋保護の研究など、非常に幅広い研究活動を行なっている。市原助教の実験に対する真摯な態度は、教室員一同のみならず、彼のもとにその実験テクニックを学ぼうと集まった多くの学内外の研究者にもまた、よき模範となっている。酒井助手は、虚血心筋におけるグリコーゲンホスホリラーゼ活性の上昇に及ぼす、交感神経系の役割について解明した。酒井助手は昭和60年2月から2年間、フランスのパスツール研究所へ留学し、つい先頃帰国したばかりである。フランスで学んできたアラキドン酸代謝産物の定量法を、循環器系へ応用した今後の研究成果が期待される。新潟大学医学部薬理学講座へ転出した石橋助手は、安孫子教授のもとで冠血管の拡張因子について実験し、新たな問題提起をした。本講座を離れてしまったことは非常に残念であるが、現在新潟大学で活躍中である。大学院生の矢沢は、虚血心筋の電気生理学的追求をしている。矢沢は4月から一年間の予定で、岡崎国立共同研究機構生理学研究所でさらに腕を磨く。同じく大学院生の中村は、心臓に関する基礎的知識を勉強中である。助手の橋爪は虚血心筋の超微形態学的変化と、筋原線維構造たんぱく質の変化について実験している。(筋原線維に関する研究は本学化学教室の内田教授の指導によるものである。)橋爪は3月末より西ドイツ、パートナウハイムのマックスプランク研究所の循環器部門に留学予定である。本講座ではまた多くの研究生が、毎日夕刻から精力的に実験している。彼らはこれを通称「夜間部」と呼んでいて、「昼の部」に勝るとも劣らない情熱をもって実験している。このように実験方法は様々であるが、虚血心筋の病態生理について集中的に実験しているのが、薬理学講座の特徴である。我々が心おきなく実験できるのはひとえに、ほとんど全ての実験に立ち合っただけで下さる技官の横山さんのおかげである。また実験を手伝うとともに教室の雰囲気をもより明るくしている日野さん、ならびに煩雑な事務を一手に引き受けている西館さんに教室員一同深く感謝している。薬理学講座は、安孫子教授の統率のもとに、実験する時は厳しいけれど、成果が得られた時は皆で酒を酌み交わし、喜びを分かち合える教室である。

(薬理学講座 助手)

スキー教室

12月15日(月)・16日(火)の両日、北大雪スキー場(紋別郡白滝村)において、スキー教室が実施され、第1学年から第5学年まで男子23名、女子9名、計32名の学生が参加した。

第1日目は9時に医大を出発し、11時過ぎに宿泊施設である白滝観光温泉に到着し、オリエンテーション、昼食の後、直ちにスキー場に向い、講習を行った。

夜には、懇親会を兼ねた夕食会が開かれ、夜の深まりと共に、親密の度合も深まっていった。

明けて第2日目。眼い目をこすりながら朝食を食べ、スキー場に向えば、身も心も引きしまり、力いっぱい講習が行われた。

昼食を食べ、午後2時にスキー場を立ち、帰路についた。

有意義にして楽しい2日間であった。

来年度も、学生諸君の参加を待っています。

(学生課)



学生証の更新及び査証について

学生証は、毎年1回の査証と3年毎の更新が必要です。

62年度も4月1日(火)から次により行うので、忘れずに手続きを行うこと。

○昭和59年度及び昭和56年度以前入学者

更新が必要なので、学生課学生係で旧学生証と引き換えに、新学生証を受け取ること(まだ、新学生証用写真を提出していない学生は、至急提出すること)。

○昭和57・58・60・61年度入学者

査証が必要なので、学生課学生係に学生証を持参すること。

(学生課)



借用物品の返却と貸出停止について

学生課では、学生諸君の課外活動を側面から援助するため、各種の課外活動物品の貸出しを行っているが、返却日が過ぎても返却しない学生が跡を絶たず、他学生に迷惑をかけているのが実状である。

借用にあたっては「課外活動用具貸出要項」を遵守し、返却日が来たら、早急に返却すること。

返却日を過ぎても返却がない場合は、新たに物品借用の申し出があっても、貸出停止とするので、注意すること。

行動計画書の提出について

学生団体、個人を問わず、学生諸君が学外で活動する場合（試合、練習、登山、合宿、旅行等）には、緊急連絡、事故時の救援などに必要となるので、必ず3日前までに行動計画書を提出すること。

特にクラブ活動の場合、行動計画書の提出なく事故に会った場合、傷害保険請求の際不利となることがあるので、十分注意すること。



例年のことながら、今年もまた、旭川市における最大のイベント「国際パーサー大会」の開催日が近付いてきた。最近では、当旭川市のみならず、全国の各市町村において、大小さまざまなイベントが毎日のように行われている。北海道では「札幌市の雪まつり」が国際的にも有名であるが、とくに去年は本道において、全国的に話題を呼んだ新イベントが幾つか行われた。「86さっぽろ花と緑の博覧会」（札幌市）、「北海道21世紀博覧会」（岩見沢市）もそのひとつであるが、なかでも異色のイベントとして世人の関心を集めたのは、周知の「北前船大回航」であった。

ところで、昭和60年春に、自治省が財団法人地域活性化センターと共同で行った『全国イベント調査』によると、60年9月から61年8月末日までに開催される地域イベントは、2,000余件で、しかもその中には、新規イベントが353件（前記北海道分をも含む）を数えると報告されていた。1年は365日であるから、単純に計算して、だいたい1日に1件の割合で新規イベントが行われた勘定になる。ある人はこのような最近の動向を称して、「日本列島イベント時代」と呼んだが、それもむべなるかなと思う。

では、このような地域イベントを実施する目的はどこにあるのであろうか。ここかしこで実施されているイベントを一覧すると、まず第1に地域住民の連帯感の醸成、第2に地域イメージの向上、第3にコミュニティの形成、第4に郷土意識の高揚、第5に産業の振興など、さまざまなものを意図して行われているようである。しかし窮極的なねらいは、それらのイベントを通して、地域の振

興あるいは活性化をはかることにあるようである。

今日的形態のイベントの沿革は、昭和50年代に「地方の時代」が叫ばれ、地域振興や活性化の契機として、地域イベントが極めて有効であると認められてからのこととされている。特にイベントブームに火をつけたのは、昭和56年の「神戸ポートピア」だといわれている。これは周知のように、当初は観客数を250万人程度と想定していたが、実際には1,610万人の観客を動員し、65億円の黒字を出したのである。株式会社三菱総研の報告によると、内外の総生産誘発効果は、優に2兆円にのぼるとされている。

今日のイベントブームは、このように、イベントそのものが地域振興への新たな起爆剤として位置づけられ、そしてその効果的な活用が、地方公共団体の新たな地域政策の1つと考えられるに至っているからであると思われる。しかし私は、単に表面的結果（金銭面や観客数）のみでイベントの成否を判断してはならないと思う。

地場産業のとめどない衰退と、その解決にメドさえ立たない多くの過疎進行町村にとって、同類のマチ江差町が試みた「北前船大回航」のイベントは、町づくりと地域活性化に対する1つの手本として、大きな励みになったものと思う。しかしこのイベントが残したものは、単にそれだけではないような気がする。

じつはこのイベントの起動点をさぐっていくと、一人の青年のアイデアに突き当たるのである。この奇抜で大胆なアイデアが、大イベントとして多くの観客をひきつけるまでには、青年たちの強い結束と努力のあったことを忘れてならないし、またそれを抜きにして、このイベントは語り得ないのである。彼等は青年らしい熱情をフルに燃焼させて、多くのカベを突き破り、あのイベントを成功させたのである。私はその意味で、彼等青年たちの、未知に挑む冒険心と積極進取の気性こそが、大イベント「北前船大回航」が残した最大の遺産であり、かつ教訓であるような気がしてならないのである。いまイベントが盛んである。われわれは表面の華やかさや規模の大きさに関心を拂うだけではなく、その背後にかくれているある「もの」に対しても、正しい評価を与えるものでなければならぬと考える。

(社会学 教授)